ホームレス問題を考える 15

人と人との温もりに支えられて、「抱樸館福岡」始動！

グリーンコープの地域福祉の新たな一歩が「抱樸館」の取り組みとして実現

「抱樸館」は、仕事・住まい・人との絆を失った人々の自立を支援するためのホームです。それは、グリーンコープの地域福祉運動をカタチにしていく取り組みでもあります。5月1日には「抱樸館福岡」（第2種社会福祉事業、無料低額宿泊施設）が多くの人に見守られ開所しました。4月10日、「抱樸館」を支える仕組みである「抱樸館を支える会」が設立され、設立記念の地域福祉シンポジウム「新しいセーフティネットを考える」が開催されました。

開所式、設立総会、シンポジウムのようすを報告します。

非営利徹底型・一般社団法人

「抱樸館を支える会」

設立総会及び設立記念シンポジウム

主　催　社会福祉法人グリーンコープ
共　催　NPO法人北九州ホームレス支援機構
　　グリーンコープ共同体
後　援　厚生労働省
参加者　グリーンコープ組合員など
　　約300人・関係団体他約50人

パネルディスカッション

これからのセーフティネットのあり方

左から司会の稲月正さん、パネラーの金口浩治さん（前・福岡市保健福祉局総務部保護課長）、三石博之さん、奥田知志さん

最後のセーフティネットとしての生活保護制度を中心に

新しいセーフティネットを考える

講師
三石　博之さん
厚生労働省
社会・援護局
保護課長

増え続けている生活保護

生活保護を受けていた人の割合が最小だったのは、1995年の0.7%。2010年では、1.43%と2倍。2009年の同月と比較すると1割強増えている。現在も増える傾向にある。4割以上が高齢世帯であり、単身世帯の割合は、全世帯の4分の3を占める。また、働けるが職が得られないという人の割合が急速に増えてきている。しかも就労によって保護を受ける必要がなくなった人は1995年から減少し、一昨年のリーマンショック以降は一層悪化している。

遅れていた自立支援

生活保護法には「経済的保護」と「自立の助長」が謳われている。しかし、国の自立支援対策は遅れているのが現状。

現在の施策としては、離職者を中心とした対策が主となっている。着目されたワンストップサービスは、社会福祉協議会や保健所などの窓口をハローワークに集中させ、住居や生活費の一時貸付、健康面での相談などトータルに応じる取り組みだ。その後、住居・生活支援アドバイザーをハローワークに設置し、継続した支援ができるようにした。

新たなセーフティネット

生活保護受給者の就労が極めて困難な現状から、社会的な居場所作りが必要になってきた。釧路市では民間企業が就労体験、NPOはボランティア体験などを実施し、就労に不安を持っている人たちの居場所を提供する取り組みが行われている。行政・企業・NPO・市民の協同が必要だ。

悪質な貧困ビジネスなどには、法的規制の強化が必要。一方で堅実な取り組みには、行政も積極的に援助していくことを考えている。

本日のシンポジウムでも国の施策に積極的な意見を得て、よりよいセーフティネットを考えていきたい。

「全国で3番目に多かった福岡市のホームレス者が、路上からでも生活保護の申請が可能になったことなどから減少傾向にある。しかし、ホームレス支援センターへの入所者が生活保護との選択からか増えていないようすだ。一方、生活困窮者には知的障がいを持つ人も多く、多様なコーディネートが求められている。しかし、行政だけでは応えきれない状況だ」と金口さんからの報告。『急激な社会状況の変化等から、セーフティネットも有効ではなくなっている』など三石さんからの発言もあった。奥田さんからは「生活困窮者の支援のためには政府や民間という概念を超えた対策が必要」と「絆の制度化」の着想の有効性が強調された。そうした意見交換を踏まえ稲月さんは「抱樸館福岡が行う『伴走的コーディネート』は、新たなセーフティネットとして国や市も着目している。『絆の制度化』は先駆性のある有効な制度」とまとめた。

絆の制度化

講師　北九州ホームレス支援機構　理事長　奥田　知志さん

社会的な責任とは何か

無縁死は年間約3000人、自殺者とほぼ同数だ。こうした状況を「無縁社会の出現」とマスコミは表現する。しかし、社会とは人と人との有機的な繋がりで構成されるもの。言葉を変えれば、他人が私事に関わるシステムだ。無縁社会という表現は、相反する概念を重ねてしまっている。この背景には、自己責任が強く問われる近年の社会状況にある。何らかの問題を抱えても「それはあなたの問題だ」とされ、相談すらできなくなる。社会が責任を持つシステムには介護保険や生活保護等がある。社会的な責任を明確にし、自己責任論を超えた社会を取り戻さなければならない。自己責任はその上で問われるべき。

家庭の役割に代わるもの

家庭とは家族の人生（誕生から臨終まで）に関わることを基盤としている。その役割は受け皿的機能（衣食住・介護・教育等）と持続性のある伴走的コーディネート機能の二つある。後者は、家族が病気になれば病院に「つなぐ」良くなれば家庭に「もどる」というような家族と社会資源（学校や介護施設等）との連携をいう。家庭の崩壊が著しい昨今、家庭に代わる受け皿機能としては、生活保護やハローワークなどを活用することができる。しかし、伴走的コーディネート機能は欠落したままだ。

困窮の概念にも、従来の経済的・身体的困窮の他に関係的困窮（単身世帯の急増など）を加える必要がある。関係的困窮に対応する制度が是非必要だ。

必要な社会制度としての「絆」、持続性のある伴走的コーディネート

家族との絆が絶たれているホームレス者が将来にわたって、安定した生活を得るためには、制度の中でのコーディネートでは限界がある。その人の人生そのものを支援する伴走的コーディネートが必要だ。こうした仕事をする（絆支援員（コーディネーター））が、社会的に認知されたプロとして存在すべきだ。

抱樸館福岡の相談員は、昨年秋から取り組みをはじめ50人の野宿者の住居のコーディネート等を行っている。その人たちのためにも、これから必要なのは人生に伴走するコーディネーターだ。

抱樸館福岡はそれに挑戦する。

「抱樸館を支える会」設立総会

グリーンコープの各単協はじめ17法人により「抱樸館を支える会」の設立総会が開催されました。

設立記念シンポジウムは、厚生労働省の三石博之さんの講演、北九州市立大学教授稲月正さん、福岡市行政の金口浩治さん等によるパネルディスカッションがありました。行岡良治さんは「将来、これでよかったと思える展開をしていきたい」という決意表明でシンポジウムを締めくくりました。

抱樸館を支える会は多くの組合員や市民が賛助会員となって、抱樸館の運営資金を恒常的に支えていく善意の仕組みです。まずは抱樸館福岡を支えるために取り組みます。ホームレス者を支えることは、現代社会の中で断ち切られた絆を新たに作ることでもあります。それは、支える人にとっても経済性や権威に縛られない、愛と慈しみに満ちた真に豊かな人間の関係を生み出すものとなると考えます。会場全体にあたたかく見守られながら、社団法人社員によって設立までの経過・設立趣意書が確認され、定款が採択されました。

新役員は下記のとおりです。

役　員

代表理事	行岡　良治	社会福祉法人グリーンコープ理事長
理　事	田中　裕子	グリーンコープ連合会長（グリーンコープ共同体代表理事）
	田原　幸子	グリーンコープ生協ふくおか理事長
	東原晃一郎	グリーンコープ生協ふくおか専務理事（グリーンコープ共同体専務理事）
	奥田　知志	NPO法人北九州ホームレス支援機構理事長（社会福祉法人グリーンコープ副理事長）
監　事	工藤　正直	グリーンコープやまぐち生協専務理事
	河添　文彦	グリーンコープ生協くまもと専務理事

5月1日開所式を迎えました

福岡市長　吉田さん

厚労省局長　清水さん

増え続ける路上生活者の身を案じて１日も早い開設が求められていた「抱樸館福岡」。一度は予定していた施設が白紙撤回になるなどの困難にも遭遇しました。昨年２月、福岡市東区多の津住民の了解を得て、建設に着工。５月１日、待ちに待った開所式を迎えました。当日は行政関係者、地域住民代表、NPO法人北九州ホームレス支援機構関係者、社会福祉法人グリーンコープ関係者、組合員など約230人が参加し、開所を祝いました。挨拶の一部を紹介します。

来賓の方々

福岡市長	吉田　宏さん
厚生労働省社会・援護局長	清水　美智夫さん
福岡県福祉労働部長	服部　誠太郎さん
部落解放同盟福岡県連合会執行委員長	
衆議院議員	松本　龍さん
福岡市東区多の津5丁目町内会	吉田　学さん
NPO法人ホームレス支援全国ネットワーク副理事長	水田　恵さん

挨拶する行岡理事長

開所式では冒頭に、社会福祉法人グリーンコープ理事長行岡さんが主催者を代表して次のような挨拶をした。

「今から22年前のグリーンコープ誕生時、私たちは安心・安全な商品を売る組織ではなく、母親たちが助けあって食べものを作りあげ、それを分けあう集団でありたいと、活動の基底に『生命』を置いた。その後、介護事業や、子育てする母親たちへのサポートへ踏み出す時も『生命に寄り添う』に立脚した。5年前からの生活再生事業も、そもそもは生協の支払いに困っている組合員に手をさしのべるところからはじまった。そのようなグリーンコープが、今路上で悲惨な生活をしている人たちを傍観するわけにはいかない。

生きていくためには自助と共助と公助が必要だが、お互いに助けあうという共助が十分に機能していない現在、せっかくの公助も生かされていない。公助と共助がつながることで自助に向かいたい」。

また来賓挨拶として福岡市長吉田さんは、「福岡市のホームレス者は全国で5、6番目に多い。そうした中で、抱樸館福岡の開設は、何より地域の理解があることがすばらしく、そのことに心から感謝したい。今、子どもの虐待など、それぞれに解決が難しい問題があるが、こうした地域の『温もり』が大切な要素になると思う」と述べ、「運営については、行政としても手を携えていきたい」と結んだ。

厚労省局長清水さんより「地域福祉へと向かわれているグリーンコープの皆さんの『思い』と、北九州ホームレス支援機構の皆さんの『実績』が重なって抱樸館福岡の開所が実現した。加えて、市や県ほか関係者の皆さんの配慮に敬意を表したい。4月26日、総理から『困窮されている人々に対しては、個別、継続的に対策を講じるように』と通達があったばかり。この取り組みはまことに時宜を得たもの。国として今後もフォローアップしていきたい」。

全国ネットワーク副理事長水田さんより「市長の『温もりのある街に』と地域住民の受け止めには感動した。これまで支援の現場では『ホームレスは出て行け』しかなかった。抱樸館福岡の成果を日本のホームレス支援の成果として広報していきたい」。

地元町内会を代表して吉田さんは、「昨年2月に突然今回の話を聞いたが、反対する理由がなかった。心から歓迎したい」と挨拶。抱樸館福岡の裏手の庭には町内会の人々の手ですでに桜の苗木が植えられている。

奥田さんは、「入所者の方が自立後、ここがふるさとになるよう願っていたが、今は抱樸館福岡を含めたこの地域がふるさとになると感じている。来年は地域の方とともに花見をしたい。今回の開設は日本のホームレス支援を凌駕する取り組みになった」と締めくくった。

「抱樸館」看板の除幕式も行われた。書は韓国の詩人、思想家である金芝河（キム ジハ）さんによる